

公共空間の庭化
一場所を使う能力を高める一

22019037 吉田 風沙
指導教員 宮 晶子 教授

庭化 公共空間 都市
居場所 環境 ずれ

1.背景と目的

公園でバドミントンをしようと赴いたら、球技禁止の張り紙がしてあった。椅子の代わりになりそうな台に腰掛けようとしたら座らないで下さいという張り紙があった。このように「こうしたいと思ったらできなかった」という経験を繰り返すうちに、初めて訪れる場所で真っ先に案内が書かれた張り紙を探し、この場所は何をしても良いのか、何をすべき場所なのかを意識するようになった。学校や美術館の芝生を避けて歩く人が多いのも、以前どこかの施設で「芝生に入らないでください」という張り紙を見かけたことがあったために、ここも入ってはいけないと思い込んでいるからだろう。

このように近年の公共空間は実際には行動が制限されていないような場所であっても、過去の経験や常識などから無意識に行動を制限してしまい、場所を観察し使う力が失われてしまっているのではないか。

そんな無意識に抑圧されている「場所を使う能力」を「庭化」を用いて引き出し、都市の中に自分の居場所を獲得できるような公共建築を設計することで、日本人の居場所づくりに対する本能を呼び起こせるとともに街への愛着が高まるのではないだろうか。また、庭化による新たな公共空間の使われ方、都市のあり方を提案することで、街中の風景の質を高め都市の価値の向上を期待する。

2.庭化とは何か

フランスの研究者シリル＝マルランの『「私的」な庭の地理学的意味と風景』では、庭は単に植物が植えてある囲まれた外部空間ではなく、現実の一部の聖なるものへの指標化なのだと言われ、ニコラ・フィエヴェの言葉を引用しつつ述べている。そして現実を庭へと指標化する時間、庭づくりの行為を導く状況における行動の変化を「庭的行動 *comportement-jardin*」と呼び、それによって生み出される庭を「私的な庭」と名付けている。



図1 植木鉢による庭化(谷中)

この研究をもとに本研究

では庭の定義を家などの空間とは異なり完全に私有ではないがその領域を所有している状態と定義する。そして人が空間を知覚し、環境を読み取って、物を置くなど手を加えることによってその空間を所有する、つまり「庭的行動」によって「私的な庭」をつくることを、「庭化」と定義する。(図1)

庭では自ら環境に手を加える作庭行為によって自分の領域を獲得する。その中で他者を眺めたり、外から自分の領域を見ることで自分の存在を感じることができる。(図2)

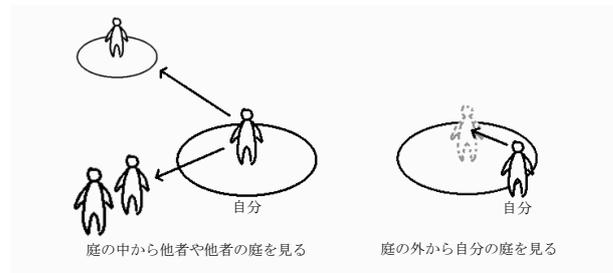


図2 庭のイメージと関係性

このことから設計者が計画するべきは、ある行為を行うための完成された場ではなく、ある行為を引き起こすためのきっかけなのだ。つまり使用者が手を加えるための余地を残しておくことが庭化が引き起こすと考えられる。また、庭化の手段として環境に身を置く方法と環境にもものを置く方法が挙げられ、場所やものの種類によって庭のあり方も変化することから庭は個人による所有性が高い領域と言える。

3.庭化の分析

庭は日本人と深く結びついた関係にある。その理由として日本の都市の隙間の多さが挙げられる。川添登の著書『都市空間の文化』において、日本は建物が高さも大きさも不揃いな、隙間をもった都市であると述べられている。このように日本の都市は流動性があり領域がはっきりしていない空間にあふれていたことで、それをどのように使うのか、個人で思考する余地が十分にあった。それが図1の風景につながっているのではないか。

次に実際に庭化が起きている事例を集め、庭の構成要

素を抽出した。(図3) その後抽出した要素の関係性を考察し、以下の図のようにまとめた。(図4)

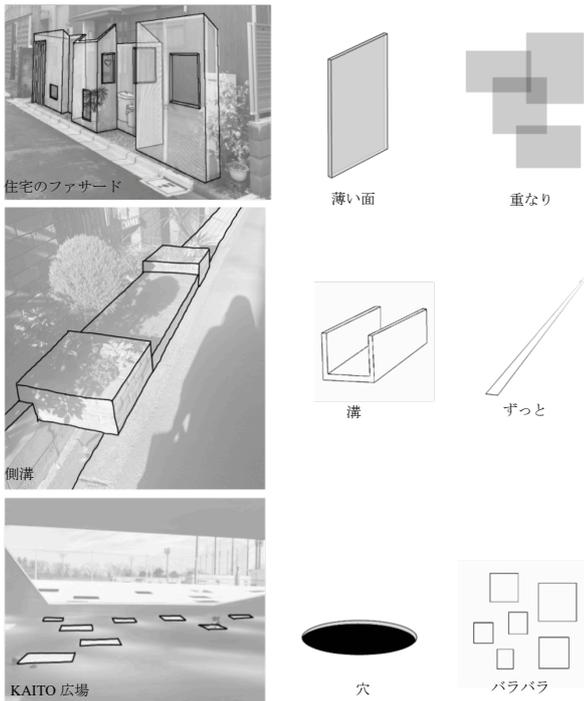


図3 構成要素の抽出

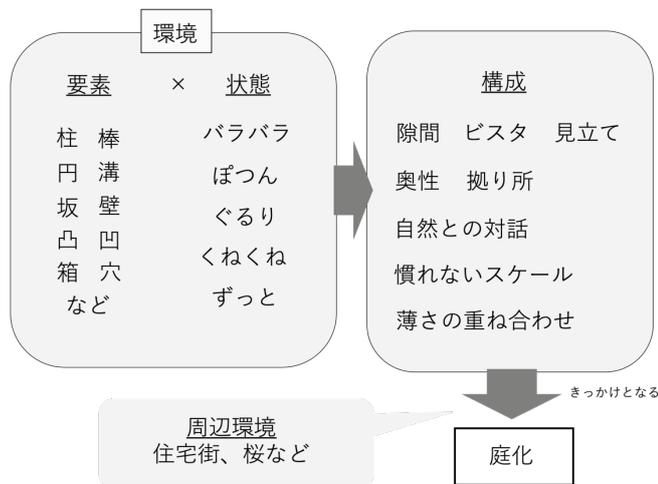


図4 庭化のプロセス

このように要素とその配置の状態によってできた関係から構成を見出した。それらがきっかけとなり庭化が起こる周辺環境と風景をつくれるのではないかな。

4. 敷地

敷地は千代田区の番町を選定する。番町地区は千代田区の中でも比較的人口が多く、オフィスやマンションが並ぶビル街という特性上、公共施設だけでなく街路でも

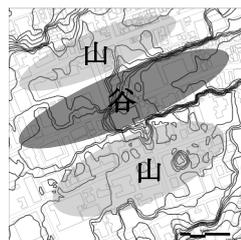


図5 敷地図

庭化が起きにくい都市である。また、半蔵門から九段上にかけて谷道と尾根道が続いており、均一な街区に反して、山と谷が連なる特徴的な地形を持つ。今回はその山と谷の境目に位置する公共施設を庭化を促す建築として計画する。

5. 設計提案

現状と同じく低層階に保育園・児童館・図書館・集会室、高層階に住宅の機能を持った建築を提案する。住宅を含む高層棟と集会室や図書館、児童館・保育園を含む低層棟は別構造とし、低層の巨大ピロティのような空間を地域に開放する。

- ・手がかりの配置手順

地形や構造などの基準となる手がかりを庭化のプロセスが成り立つように配置し、それにより生まれた環境をもとにさらに手がかりを配置する。一例として溝の配置プロセスを示す。敷地に溝という要素をぐるりと一周させることで、高低差による溝のスケール変化が発生し、多様な行為(図7)が生まれる。そして、その溝を手がかりに構造体の柱が現れてくることでまたそれを投げ所にしたてかける、もたれかかるといった行為が生まれる。この操作を繰り返して低層棟を計画する。

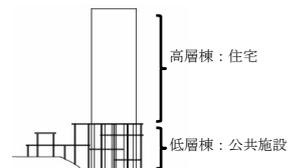


図6 建物構成



図7 スケール変化による多様な行為—溝

- ・手がかりの余波を受ける

住宅である高層棟は構造や構成における合理性をとりつつ、下層のから影響を受けるように庭化の要素を入れ込む。それにより住宅においても庭化が広がるようにする。例として地上にある溝が分岐し階段となって立体化することで、フロア内に溝が巡る。この溝によって住戸内では溝による隙間を収納にするといった新たな空間の使い方が生まれる。

このようにして使用者が環境の中から庭という自分の存在と向き合うことができる空間を作りだすことによって、その場所に愛着を抱くことができる。また、庭たちがもたらす豊かな風景が都市の共有財産として地域の価値の向上につながることを期待する。

主要参考文献

- ・ Cyrille Marlin. "Projets de Paysage 「私的」な庭の地理学的意味と風景". Open Edition Journals. <https://journals.openedition.org/paysage/14022>. (2023.12.31)
- ・ 中村良夫著『風景学入門』中央公論新社(1982)
- ・ 川添登著『都市空間の文化』岩波書店 (1985)